

「お静に……」

「ア、ハハハハハ——」

「オイ、何を仕てるねん」

「船頭は早よ来いと云ふし、下女はお静にと云ふし、何う仕たら宜いね」

「早う来んかいな」

「オーウ、早よ来い、く」

「船頭はん、此のお客さん一人で五人前取つとくれ、此のお客さん一人で二人前、三人で五人前、二人で三人前取つとくれ」

「何を云ふてよるねん」

「あれは一人前の場所やと込合ふてくると座つて居られんで一人で二人前を取つてゆつくり座るとか、三人で五人前の錢を拂ふて足を延すとか、一人で五人前場所を買ふて寝るとかするねん」

「ア、そうか……オイ船頭はん、二人で一人前取つてんか」

「何を云ひなさるねん、一人でも狭いのに二人で一人前で何うして座りなさる」

「一人座つて、一人肩くまするねん」

「そんな事を仕たら肩が痛うて大阪まで行かれへんで」

「肩が痛うなつたら牧方で上と下と交代するが」

「何を云ひなさる、早う乗りなされ」

「どやくと船へ乗り込みますと、それへ物賣屋が参ります。

「何方もお土産はどうどす、お土産はどうどす、おちりにあんぽんたんはどうどす、西の洞院紙はよろしおすか、おちりにあんぽんたん、あんぽんたん……あんた、あんぽんたん」

「コラ、其方へ行け何をぬかしやがるね」

「オイ、何を怒つてるねん」

「こいつ、私の顔を見て、あんたあんぽんたんや云ひよるねん」

「違ふく、お前の事やない、あんぽんたんと云ふ菓子があるねん」

「そんな妙な菓子があるのか」

「かきもちのふくれたんに砂糖の衣がかつたあるのや、東山とか云ふ俗にあんぽんたんとも云ふ」

「妙な事を云ふねんな、おちりて何や」

「ちり紙の事を京は言葉がやさしいので、おちりと云ふねん」

「西の洞院紙て何や」

「大阪で漉直し、京で西の洞院紙、東で淺草紙と云ふそうな」